【別紙様式1】

大分市立下郡小学校　学力向上プラン1（８月）

取組番号②

学校教育目標	夢に向かい、学び合い、認め合い、鍛え合う主体的に生きる子どもの育成
育成を目指す資質・能力	・基礎的・基本的な力を確実に身に付ける ・身に付けた力を生かし、自分で考え、判断したり表現したりする ・自分から進んで学び、粘り強く挑戦する

児童生徒の課題

学力状況について

各種学力調査の分析結果から明らかになった課題

○学年全体の平均正答率では、どの教科も概ね学習内容の定着ができている。しかし、個人差がある。
□学習内容と日常生活の中にある現象との関係性がつながっていない。
□段落数や文字数、使う言葉などの条件にそった文章を、書けない児童が多い。
□問題の読み間違いや勝手な解釈で答えを出す児童がいる。
□無回答や、時間配分がうまくいかずに最後の問題まで取り組めていない児童がいる。

学習状況について

各種学力調査の分析結果から明らかになった課題

○学習意欲や理解、学習することの必要性等について、肯定的に捉えている児童が多い。
○授業内容が「分かった」「できた」と肯定的に感じている児童が多い。しかし、個人差がある。
□全ての児童に「分かった」「できた」 と感じさせるよう、個別の指導や教科担任制による専門性を生かした指導などを工夫し、より一層意欲的に授業や学習活動に取り組めるようにすることが必要である。

これまでの学力向上の取組に対する児童生徒の状況(授業及び授業以外の側面から)

○ワークシートの工夫やICT機器の活用等、考えを文章で表す活動を続けたことで、文章を書くことへの抵抗感は減り、自分の考えを進んでノートに書けたと肯定的に捉えている子が多い。
○知識・技能の観点では、スモールステップや習熟度別、個別の指導に加え、高学年での教科担任制にも慣れ、学習内容の定着が図れている。
○算数の文章問題では、線分図や数直線を立式の際の根拠として、系統的に利用できるように、引き続き、指導したことが、日々の授業に生かせている。
○考えを交流する方法を工夫して行うことで、自分の考えや理解を深めることができた。
○音読の指導を増やしたことで、一つ一つの言葉を意識して音読するようになっている。読み取りの問題で成果が出てきている。

指導の状況

1 組織的な授業改善の取組状況

○考えを伝え合う活動では、ノート交換、ロイロノートなどのICT機器やホワイトボードの活用で意見の交流を図るとともに、ペアやグループでの話し合い活動を継続して行い、学習内容についての理解を深めることができた。
○低学年では、教材教具を工夫し、時間・単位などを実感や量感が伴えるように指導を行うことで、「分かった」「できた」と実感できる授業づくりができた。
○中学年では、ヒントカードなどを用いて支援を要する児童の手立てとし、考えを広げたり深めたりするために考えを視覚化したりペア活動やグループ活動を効果的に取り入れたりした。
○高学年では、教科担任制を導入し、教材研究を深め、指導方法の改善・工夫ができ、効果的な指導ができた。

2 その他の学力向上に向けた指導の取組状況

○家庭学習では、ドリル学習だけでなく、週末課題の工夫で思考力を育む学習が行えた。また、中学年以上では、自主学習の内容が充実するように学年に応じた指導を行った。
○学校図書館の利用を積極的に取り入れ、読書量の向上と発達の段階にあった質の向上の条件改良を行い、継続した指導を行っている。。
○週末課題で初見の物語文などのプリントを出し、読み取りの力を付けさせていくようにした。また、文章題のプリントを出し、立式の際の根拠を正しくもたせるようにした。

学力に関する達成指標

児童アンケートで「授業で『分かった』『できた』と感じることができた」と答えるこどもを95％以上にする。

今後の具体的な取組

【授業改善】

〈授業改善のテーマ・重点〉

○こどもが「分かった・できた」と感じることのできる授業づくり
○こどもが自ら考えを伝え合いたくなる授業づくり

〈取組内容〉

○「めあて」と「振り返り」、「課題」と「まとめ」の呼応関係を大切にする。
○課題を位置付けるまでの「こどもの問い（問題意識）」を大切にする（こども主体の学習）
○課題解決の場面において、「自分の考えをかく（書く・描く）」「自分の考えを説明する」「友だちの考えを理解する」活動を重視する。
○一人1台端末のデジタルドリルなどを活用して、個別にあった学習内容の反復練習を行う。

〈取組指標〉

○算数科を中心に、課題が位置付くまでの過程を工夫し、「こどもの問い（問題意識）」を引き出しながら、こどもの声から「課題」を引き出す授業づくりをする。
○解決のための手掛かりをこどもの声から引き出し、課題解決ができそうだという解決のための見通しをもたせる場を位置付ける。
○共感的に理解することのよさや喜びを体得させるため、友だちの考えを聞く、読み取る場を設定する。
○自己決定する力を育むために、自分の学びをまとめる、振り返る場を設定する。
○効果的な活用事例を検討するため、一人1台端末を用いた家庭学習の取組を交流し、実践事例の積み重ねを行う。

〈検証指標〉

・「自分の考えを進んで書くことができた」と答えるこどもを95％以上にする。
・「進んで考えを伝え合うことができた」と答えるこどもを95％以上にする。
・「分かった・できた」と答えるこどもを95%以上にする。
・単元テストを行い、国語・算数のテストの「思考・判断・表現」で80点以上の達成者を80％以上にする。

【家庭・地域との協働】

〈家庭・地域の取組内容〉

家庭
・親子でメディアコントロールに取り組む。
・家庭学習、読書の習慣を身に付ける。
地域
・ゲストティーチャーとして協力する。

〈家庭・地域の取組指標〉

・学習時間を確保し、自ら学ぶこどもを育てる。
・規則正しい生活習慣を身に付ける。

〈家庭・地域の検証指標〉

・毎日決められた時間（学年×10分＋10分）、家庭学習に取り組んでいる子どもを80％以上にする。
・メディアコントロールを行い、生活習慣（早寝・ 早起き・朝ごはん）が定着している子どもを80％以上にする。

【授業改善以外の学力向上の取組】

○9年間を見通した家庭学習の指導を行うことによって、こどもたちが学年に応じた家庭学習時間を確保する。
○校時表の見直しを行い、週2回の学年会の時間を確保する。そのうち1回を学年での教材研究の時間として設定する。
○各教科等の学習で学校図書館の蔵書を積極的に活用する教材研究を行い、学習・情報センターとしての学校図書館の機能の充実を図る。